

去る 2 月 11 日（木）にぐんま教育のつどい 2016 が群馬県青少年会館で開催されました。参加者は、教職員や高校生を中心に総勢 80 名でした。

まずオープニングでは、前橋工業高校の空手道部女子 3 名による演武が披露されました。見ていて気の引き締まる素晴らしい演武でした。

全体会

「学びがつくる市民社会を目指して～ 考え、伝える力を育てる～」

開会行事は滞りなく執り行われ、そのあと、「学びがつくる市民社会を目指して～考え、伝える力を育てる～」のテーマのもと、全体会（午前）では「18 歳選挙権」についてパネルディスカッションが行われました。パネリストには SEALDs の林田光弘さん（明治学院大学 4 年）と群馬県高校生会議の高校生 2 人（真下奏一さん（前橋高校 3 年）、小高広大さん（高崎高校 2 年））を招き、さらに現役の高校教諭（澁谷正晴さん、田口有理さん）にも参加していただきました。コーディネーターは堀込康美さん（高北）に務めていただきました。

全体会は、まずパネリストに自己紹介の中で活動や問題意識等について語っていただき、その後はパネリスト同士の意見交換、会場発言などで進んでいきました。パネリスト同士の意見交換は今回の企画のいちばんのヤマだったと思います。ずっと聞いていたいと思えるものでした。林田さんにしても、高校生にしても、私が恥ずかしくなるくらいに多くを学び、多くの経験をしてきていました。そこから発せられる言葉は、大人が若者に対して重い責任を負っていること



を意識させられるものでした。現役教師のお二人も、現場での状況を踏まえた鋭い切り口で若者の意見について答え、問題を提起する発言をされていました。

パネルディスカッション

①主権者教育について

パネルディスカッションの中味については、特に主権者教育や政治的中立性をめぐって白熱した議論が展開されました。

若者が主権者として育っていくために、どのように社会と関わっていくかを考えさせたい。これが大人の側からの気持ちですが、林田さんや高校生たちからは、現状の学校教育、特に進路指導のありかたについて疑問が投げかけられました。明るい未来のために就職や進学をする若者は少なく、いい大学、安定した企業、安定した生活ということがゴールとして設定され、それに向かって多くの教師は指導しているということでした。



「学ぶ楽しみ」を教えてくる先生に巡り会えた人が社会へ出て大きくなっている（林田さん）、学校外では学ぶことが多い（小高さん）、中学で生徒会顧問に感化されて自治を学んだ（真下さん）といった声に対し、私たち教師（大人）は大きな責任を感じざるを得ませんでした。教師お二人は、すべての場面で人を育てることを考えたい（澁谷さん）、育成会の活動を見ていると、教師や親がパフォーマーになって子どもに考える苦勞をさせていない（田口さん）と、コメントしました。本当にその通りだと思いました。

②政治的中立性について

政治的中立性については、色々な意見が出ることで中立性が保たれるという認識が全体で共有されました。これについてはお二人の次の意見が重要かと思います。学校教育法の条文から解釈すると、政治的中立性を保つべきは「学校」であるから、それぞれの教師が各々意見を示すことで、学校全体でバランスが保てることになる（澁谷さん）。多くの選択肢がほしいから、ダイナミズムがないとダメ（林田さん）。また、会場からは、「政治をやっている側は批判されて当然の立場であり、彼らが中立性を強要するのはおかしい」という意見が出ました。

政府は、自分たちの政治の方針を公表し、政策などをメディア等を通じて広く国民に周知したり、メリットなどを前面に出してアピールしたりすることができます。政府が主張したいことを簡単に伝えられる点で、他の政党や政治団体よりも優位に立っていることとなります。

最後のほうで田口さんがコメントしたことが印象的です。ある弁護士の言葉を紹介し、本当に怖いのは現場が自主規制をしてしまうことであると。会場発言をしてくれた高校生も具体的な情報を教師に望んでいました。選挙制度のしくみを学んだり、模擬投票を試みたりといったことだけでなく、政党間の主

張の違いについてははっきりと知りたいたい。現場の教師が、差し障りのない表面的な言葉による政治的教養の授業をしても生徒は選挙に行くことは到底考えられません。政党の違いを述べれば当然に具体的な話に触れていくと思います。そこでおかしな「中立性」を意識して話を止めてしまう、あるいはすり替えてしまうなどという「自主規制」をしては、生徒の選択肢の幅を狭め、市民を育てることとは正反対の方向へ向かうことになるでしょう。

今回の全体会は、「18歳選挙権」について深く考える良い機会になったと思います。大人が子どもたちに負っている責任を改めて自覚させられました。若者たちの力を見くびってはならない。彼らの力を見くぶり自らの背中を見せず、彼らを子ども扱いすることは大人の責任を放棄していることに他ならない。そう自分に言い聞かせて今後の主権者教育に取り組んでいきたいと思っています。



真下さん（左）と小高さん（右）

分科会

午後の分科会は「授業づくり」（17人）、「私たちの権利とサービスについて考える」（11人）、「生徒指導と特別支援」（12人）の3つに分かれて行われました。それぞれの参加者が普段から感じている疑問や思いを出し合って語り合い、充実した交流の時間となりました。

この「つどい」は一年に一度、私たちが集まって、自主的に学ぶとても良い機会だと思います。来年度はさらに多くの人たちと一緒に学びたいと願っています。